

# ダニエル書 - 第二十三番

軽蔑する男たち

Jeff Pippenger

2023-12-18

ホワイト姉妹は、ニューヨーク市の巨大な建物が打ち倒される時、ヨハネの黙示録18章1～3節が成就すると指摘した。

これらのことの後、私は、天から降りてくるもう一人の天使を見た。その天使は大いなる権威を帯び、その栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔たちの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富を得たからである。」黙示録 18:1-3

2001年9月11日までに、地の「王たち」はすでにローマ教会と姦淫を行っていた。第二次世界大戦後、ハリー・S・トルーマン大統領は1951年、初めてバチカンに駐在する大使を任命した。教皇庁と政治的関係を築こうとする彼の試みはアメリカ合衆国議会によってきっぱりと拒否されたが、数十年後の1984年にロナルド・レーガン大統領がバチカンに大使を任命したときには、そうはならなかった。2001年までに、すべての国々は、ツロの淫婦であるバチカンとの外交関係を樹立することによって、姦淫を行っていた。

2001年9月11日の時点で、すべての「国々」は、彼女の姦淫の怒りのぶどう酒を飲み干していた。バビロンのぶどう酒は、教皇制が唱えるさまざまな虚偽のすべてを象徴しているが、これらの節で特に指し示されている特別な種類のぶどう酒は、彼女の姦淫の怒りのぶどう酒である。教皇制の怒りとは、彼女が意見を異にする者たちへの迫害である。彼女は国家権力を用いて、その汚れ仕事をさせることで迫害を遂行する。彼女の怒りのぶどう酒とは、彼女が異端と見なす者たちに対して国家を用いるという行為を表す、彼女特有の誤りの特別な銘柄である。

1840年8月11日から1844年10月22日までの期間に、暗黒時代から呼び出され、のちにローマの娘たちとなったプロテスタント諸教会から分離されたミラー派再臨運動は、新たに現れた地の獣の上にある真のプロテスタントの角となった。ペテロは、神に新たに選ばれたその民の、一つの国民としての特性を明らかにしている。

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、神の所有とされた民である。これは、あなたがたを暗闇からその驚くべき光へと召し出してくださった方の栄誉を告げ知らせるためである。あなたがたは、かつては民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けていなかったが、今は憐れみを受けている。第一ペテロ 2:9, 10。

2001年9月11日の時点で、セブンスデー・アドベンチスト教会は、異端と見なした者たちを攻撃するためにアメリカ合衆国政府の政治機構をすでに幾度となく利用していた。2001年よりはるか前から、アドベンチストは、彼らが異端と見なした者たちを攻撃するため

に国家権力を用いることを象徴するバビロンの特別なワインをすでに飲んでいた。

エフライムはヤロブアムの反逆とイスラエルの北王国の象徴であり、イザヤ書二十八章は、セブンスデー・アドベンチスト教会をエフライムの酔いどれと呼んで語りかけることから始まる。

災いだ、エフライムの酔いどれどもの誇りの冠よ。彼らの栄華の美はしぼむ花のようで、酒に打ち負かされた者たちの肥えた谷の頂にある。見よ、主は強く力ある者を備えておられる。それは雹の暴風、滅びをもたらす嵐のように、あふれ返る力ある大水の洪水のように、手で地に投げ落とす。誇りの冠、エフライムの酔いどれどもは、足の下に踏みにじられる。そして、肥えた谷の頂にあるその栄華の美しさは、しぼむ花となり、夏の前の早なりの実のようになる。それを見る者がそれを見るや、なお手の中にあるうちに、それを食べ尽くしてしまう。その日、万軍の主は、その民の残りの者たちにとって、栄光の冠、美の宝冠となられ、裁きの座に座る者には裁きの霊となり、戦いを城門へと押し返す者たちには力となられる。しかし彼らもまた、ぶどう酒のために迷い、強い酒のために道を外れた。祭司も預言者も強い酒のために迷い、ぶどう酒に吞まれ、強い酒のために道を踏み外す。彼らは幻において誤り、裁きにおいてつまづく。まことに、すべての食卓は嘔吐物と汚れで満ち、清いところがない。イザヤ書 28:1-8。

第三のわざわいは2001年9月11日に到来し、それは「エフライムの酔いどれたち」の指導者層を表す「冠」の上に到来した。それは燃料満載の飛行機でメリーランド州の教会本部を攻撃したのではなく、「第三のわざわい」のイスラムの到来が「第三の天使」の「後の雨」のメッセージの始まりであったことを彼らが認識できないことを示した。彼らが自分たちはそれを宣べ伝えるために起こされたのだと公言している、まさにそのメッセージと働きの始まりである。彼らは、指導を象徴する「冠」であるだけでなく、「高ぶりの冠」としても見なされており、こうして、ハバクク書2章の論争の中で、かつて今も生み出されている礼拝者の二つの階級のうちの一方であることが示されている。2001年9月1日、ハバククの見張り人たちは城門での戦いにおいてその持ち場についた。

エルサレムの門は、エルサレムの民の交流が行われた場所である。門での戦いは、東風の日（イスラムの日）に始まったイザヤ書の前の章の「論争」を表している。この箇所に出てくるハバククの礼拝者の二種類は、二つの冠によって表されている。エフライムの酔いどれどもは、その時点ですでに、自分たちが異端と見なした者たちとの論争に勝つために国家権力を用いており、彼らは万軍の主の冠と対比されている。キリストが万軍の主として表されるとき、それは御自身の軍勢の指導者としての働きを象徴している。門での戦いとは、真の神学と偽りの神学をめぐる論争によって表される戦いである。

エフライムの酔いどれにたとえられているのは、単に総会の指導部だけではない。祭司（牧会の務め）や預言者（神学者・教育者）もまた、強い酒のために道を踏み外している。イザヤがその預言の冒頭で語っているように、それは教会全体のことなのである。

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見た幻。天よ、聞け。地よ、耳を傾けよ。主が語られたからだ。「わたしは子らを育て、養い大きくしたが、彼らはわたしに背いた。牛はその持ち主を知

り、ろばはその主人の飼槽を知る。しかしイスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。ああ、罪ある国民、咎の重荷を負った民、悪を行う者の子孫、墮落した子らよ。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を怒らせ、背を向けて離れ去った。なぜなおも打たれねばならないのか。あなたがたはますます反逆を重ねるだけだ。頭はことごとく痛み、心はすべて衰え果てている。」イザヤ書 1:1-5。

罪深い国は病んでおり、彼女の心と意を変えようなどんな治療も施せる時期はすでに過ぎてしまった。イザヤは、酔いどれどもが道を外れていると指摘し、その道をエレミヤは「いにしへの道」と呼んでいる。2001年9月11日、後の雨が降り始め、そしてエレミヤは、酔いどれどもが外れてしまっているその「道」、すなわち「いにしへの道」を私たちが歩むときに、後の雨の安息を見いだすのだと述べている。

主はこう言われる。道に立って見よ、昔の道、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだすであろう。しかし彼らは、「そこを歩まない」と言った。また、わたしはあなたがたの上に見張りを立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「聞き入れない」と言った。それゆえ、国々よ、聞け。会衆よ、彼らのうちに何かあるかを知れ。地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災いをもたらす。すなわち彼らの思いの実を。彼らがわたしの言葉にも、わたしの律法にも耳を傾けず、これを退けたからである。エレミヤ書 6:16-19

エフライムの酔いどれたちは、2001年9月11日にはすでに道を外れており、また1863年には、「古き道」を退ける過程に着手したとき、「後ろへ退いた」のである。「古き道」においてこそ、後の雨による安息と潤いが見いだされるのであり、しかもその雨は、彼らに「わざわい」が宣言されたまさにその時に始まった。イスラムの第三の「わざわい」は、エフライムの誇りの冠には見分けがつかなかった。彼らは、預言におけるイスラムの役割を示す基礎的真理を次第に退けてきたからである。エレミヤは、その時、主が見張り人を起こされたことを示している。その見張り人はハバククの見張り人であり、彼らは門での戦いのただ中で、エフライムの酔いどれたちに、ラッパの音に耳を傾けるべきだと告げた。2001年9月11日に到来した第三の「わざわい」は、第七のラッパであった。

イザヤは次のように指摘している。「彼らは強い酒のために道を踏み外し、幻において誤り、裁きにおいてつまづく。すべての食卓は吐瀉物と汚れで満ち、清い場所がない。」1863年に導入され、「七回」を取り除き、さらに説明用の配布資料を伴うことを要した偽の表は、ハバククの二つの聖なる表の偽物である。しかし、酔いどれたちが用いている偽物の「テーブル」は吐瀉物でいっぱい、彼らは幻において誤っている。ハバククとエレミヤの見張りは、方法論をめぐる論争において、「幻」を「板」に書けと告げられたが、酔いどれの偽の表は誤った幻を示している。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18。

エフライムの酔いどれたちは神の律法を退けたが、「門の戦い」に関する「論争」の文脈は、第一と第三の天使の運動において確立された方法論によって示される神の預言的律法である。イザヤが二十八章の最初の八節でその設定を整えたのち、彼は後の雨という方法論を特定し、さらにその酔いどれたちを「支配するあざける者たち」「エルサレム

において」として具体的に特定している。

彼はだれに知識を教え、だれに教えを悟らせるのか。乳を離れ、乳房から引き離された者たちである。というのも、戒めに戒めを、戒めに戒めを、行に行を、行に行を、ここを少し、そこを少し、と積み重ねねばならないからである。まことに、主はども唇と異なる舌をもって、この民に語られる。主は彼らに言われた、「これこそ、あなたがたが疲れた者を休ませる安息であり、これこそ憩いである」と。しかし彼らは聞こうとしなかった。だが、主の言葉は彼らにとって、戒めに戒めを、戒めに戒めを、行に行を、行に行を、ここを少し、そこを少し、であって、彼らが行って、うしろに倒れ、砕かれ、畏にかかり、捕らえられるためであった。それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める、嘲る人々よ、主の言葉を聞け。あなたがたはこう言ったからだ、「われらは死と契約を結び、陰府と盟約を立てた。押し寄せるむちが通り過ぎるとき、それはわれらに及ばない。偽りを避け所とし、虚偽の下に身を隠したからだ」と。ゆえに主なる神はこう言われる。見よ、わたしはシオンに、基とする石、試みを経た石、尊い隅のかしら石、確かな基を据える。信じる者は慌てることがない。わたしはまた、裁きを測り縄とし、義を下げ振りとする。雹は偽りの避け所を一扫し、水は隠れ場を押し流す。あなたがたの死との契約は無効にされ、陰府との協定は立たない。押し寄せるむちが通り過ぎるとき、あなたがたはそれに踏みにじられる。イザヤ書 28:9-18.

ここでいう「議論」は、「彼は誰に知識を教えるのか、また誰に教理を理解させるのか」という問いによって定義されている。ここでの「誰に」は学ぶ可能性のある人々を指しているが、主題は教理の理解、すなわち知識についてである。ダニエル書の封印が解かれると、知識が増え、それは神の言葉の真理に対する理解の増大を表している。「教理」という語は、特定の思考体系または知識体系を形作る信条、原則、教え、規則の集合を意味する。聖書的な「教理」を理解するためには、その知識体系を形成するための聖書的な方法論が必要である。

その方法論は「命令に命令を重ね、命令に命令；規則に規則を重ね、規則に規則；ここに少し、そこに少し」として示される。2001年9月11日を第三の「災い」の到来と特定したその方法論は、第一の「災い」の預言の系列を第二の「災い」の預言の系列と結び合わせることを前提としており、それによって第三の「災い」の系列についての二つの証しが与えられる。その方法論は、礼拝者を二つの階級に分ける「論争」の試金石である。というのも、「主の言葉は彼らにとって、命令に命令、命令に命令；規則に規則、規則に規則；ここに少し、そこに少し」となり、彼らが出て行って、後ろに倒れ、砕かれ、畏にかかり、捕らえられるためである。

エルサレムを治める嘲る者たちの五つのつまずきは、五人の愚かな乙女たちを表している。その手法は明らかに一つの試練である。なぜなら、エフライムの酔いどれどもはエレミヤの古い道を退け、見張りたちのラッパの警告に耳を傾けることを拒み、偽の表を作り、死と契約を結んだのに対し、ちょうどその同じ時に、門の戦いにおいて万軍の主の冠を戴く者たちはいのちの契約を結んでいたからである。

2001年9月11日、安息と憩いである「後の雨」が降り始め、十四万四千人への印づけが始まった。それは、エフライムの酔いどれたちの方法論と、エリヤの使者によって代表され

る方法論をめぐる論争を引き起こした。「多くの者」は酔いどれたちと共に倒れるが、選ばれる少数は主を待ち望む者たちである。

主は力強い御手をもって私にこのように語り、この民の道を歩んではならないと私を戒めて言われた。「この民が『同盟だ』と言うものすべてについて、あなたがたは『同盟だ』と言ってはならない。彼らの恐れるものを恐れるな、おののくな。万軍の主ご自身を聖とせよ。彼こそあなたがたの恐れ、あなたがたのおののきとせよ。彼は聖所となる。しかしイスラエルの二つの家にはつまずきの石、妨げの岩となり、エルサレムの住民には罨と落とし穴となる。彼らのうち多くの者がつまずき、倒れ、砕かれ、罨にかかり、捕らえられる。証しを巻きとじ、律法を私の弟子たちの間で封印せよ。私は、ヤコブの家から御顔を隠される主を待ち望み、彼を仰ぎ見る。」イザヤ書 8:8-17

間違いなくイザヤは自らの言葉と一致しており、したがって二十八章で倒れる多くの者は、八章で倒れる者と同じである。八章では、彼らの転落は封印の時に起こることがわかるが、その時は2001年9月11日に始まった。八章の警告は、この民の「道」を歩むな、というものである。というのも、彼らは、後の雨のメッセージが置かれているエレミヤの古き道の道筋を歩むことを拒んだ者たちだからである。八章で倒れる者たちは、バビロンの特別な酒を象徴する同盟を頼みとする者たちであり、それは、異端と見なされる者たちに反対する目的で教会と国家が結託する同盟を表している。八章で彼らをつまずかせるのは「つまずきの石」であり、それは1863年に「建てる者たち」によって退けられたレビ記26章の「七たび」という、基礎的真理の最初の拒否を象徴している。その拒否において彼らは、天使によってウィリアム・ミラーに与えられたメッセージを退けるために、背教的なプロテスタントの方法論へと回帰した。

第二十八章において、石を退けることは押し寄せる災厄の裁きを生み出すが、これはアメリカ合衆国における日曜法から始まり、やがて全世界に氾濫する「獣の刻印」を示す聖書の象徴である。日曜法において、アドベンチスト教会が「死」と「地獄」と結んだ契約は一掃される。死と契ったエフライムの酔いどれどもを一掃する際には、彼らの「偽りの避け所」も取り除かれる。「偽りの避け所」は、使徒パウロによって強い惑わしをもたらす偽りとして表されており、エルサレムを治める嘲る者たちに注がれるその強い惑わしは、彼らの真理への憎しみに対する応報である。

その者の来臨は、サタンの働きに従い、あらゆる力とするしと偽りの不思議を伴い、また、滅びゆく者たちに対する不義のあらゆる欺きとともにある。というのも、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。それゆえ、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。それは、真理を信じず、不義を喜んだすべての者が裁きに定められるためである。しかし、主に愛されている兄弟たち、私たちはあなたがたのために、いつも神に感謝すべきである。というのは、神が初めから、御霊による聖めと真理への信仰を通して、あなたがたを救いへと選ばれたからである。このために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせるためである。こういうわけで、兄弟たちよ、しっかり立ち、私たちの言葉であれ手紙であれ、あなたがたが教えられてきた教えを固く保ちなさい。テサロニケ人への第二の手紙 2章9-15節

『強い惑わし』を生み出した『偽りの避け所』は、ついには、間近に迫る日曜法の刑罰を招く。使徒パウロは、真理を愛さない者たちの群れと、真理によって聖められている者たちの群れとを区別しており、これによってハバクク書2章の論争における二つの陣営を指し示している。イザヤ書29章では、イザヤは冒頭で、エルサレムの別名である『アリエル』という語を二度重ねる。

災いだ、アリエルよ、アリエルよ、ダビデが住んだ都よ。年に年を重ねよ、いけにえをほふるがよい。イザヤ書29章1節。

「アリエル」（エルサレムの都）の象徴的な二重化に対して、再び「わざわざ」が宣告される。「年から年へ」といけにえを屠ることは、1863年に始まった漸進的な反逆を表している。続く諸節は、日曜令危機の時期にセブンスデー・アドベンチスト教会に下る裁きを概説している。9節では「不思議」が示されており、それは方法論をめぐる論争を強調するとともに、アドベンチズムの反逆的な状態を「真夜中の叫び」のメッセージの一要素としても示している。これは、第一節における「アリエル」の二重化によって表されているように、第二の天使とも関連付けられている。

立ち止まって、驚け。叫べ、さらに叫べ。彼らは酔っているが、ぶどう酒によらず、よろめくが、濃い酒によらない。主が深い眠りの霊をあなたがたの上に注ぎ、あなたがたの目を閉ざされたからだ。預言者とあなたがたのつかさたち、すなわち先見者たちを、主は覆った。すべての幻は、あなたがたにとって封印された書の言葉のようになった。人々が、それを学のある者に渡して「どうか、これを読んでください」と言うと、彼は言う、「読めません。封印されているからです。」また、その書を学のない者に渡して「どうか、これを読んでください」と言うと、彼は言う、「私は学がありません。」それゆえ、主は言われた。「この民は口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを畏れるのは、人間に教え込まれた戒めによってである。」それゆえ、見よ、わたしはこの民の間で驚くべきわざを、いや、驚くべきわざと不思議を行う。彼らの知者の知恵は滅び、賢明な者の悟りは隠されるからだ。イザヤ書 29:9-14。

「二十七章」に記録された「討論」は、真の方法論と偽の方法論の対立を表しており、エルサレムを治める嘲る者たちの酪酊は、封印された書を理解することをアドベンチストの指導部に妨げる盲目であると見なされている。『ダニエル書』と『ヨハネの黙示録』は同一の書であり、猶予期間が閉じる直前に封印が解かれるその部分は「イエス・キリストの黙示」である。それには「七つのうちの八番目」という謎が含まれている。それは第二章でダニエルに悟らせられた「秘密」によって表されている。それは七つの雷の「隠された歴史」であり、第三の「災い」におけるイスラムのメッセージであり、また「真夜中の叫び」のメッセージである。

ダニエル書と黙示録という一つの書は、キリストの時代のサンヘドリンによって代表されてきた者たちに与えられる。彼らは、神の真理を堅持し擁護すると公言しながら、結局は真理を十字架につけることに加担する指導体制を象徴している。サンヘドリンに典型づけられるその体制は、エルサレムを支配するあざける者たちである。彼らには封印された書が与えられるが、その書が何を意味するのかについての、名望があり教養があり学問的な彼らの返答は、「それは封印されているので読めない」というものだ。次いで、指導

者として立てられた者たちだけに従うように訓練されてきた群れにも同じ書が渡されると、彼らの返答は、エルサレムを支配するあざける者たち、すなわち終わりの時代のサンヘドリンがその意味を教えてくれない限り、自分たちはそれを理解できない、というものだ。

ウィリアム・ミラーに与えられ、その後フューチャー・フォー・アメリカに与えられた方法論は、預言の歴史の道標である。それは、生死を左右する試練の問いを示す道標である。正しい方法論がなければ、後の雨のメッセージは「封じられた書の言葉のようだ」。後の雨のメッセージがなければ、そのメッセージが生み出す経験を得ることは不可能である。その方法論とは、聖書のここからもあそこからも、預言の筋道を筋道を重ねていくプロセスである。方法論をめぐる論争は、終わりの時代の初めの歴史と終わりの歴史の双方で、最初のメッセージが力を受けたときに始まった。

ミラー派運動の初期の歴史において論争は1840年8月11日に始まり、その歴史の終わり、すなわちミラー派のフィラデルフィア運動がラオデキア運動へ移行する時期に、再び繰り返された。第三天使のラオデキア運動の歴史において、その論争は2001年9月11日に再び始まり、やがてその運動の終わり、すなわち第三天使のラオデキア運動が十四万四千人のフィラデルフィア運動へ移行するときに、再び繰り返される。ミラー派の初めの試練においても終わりの試練においても、その試練はエリヤの使者の手法によって示されていた。イエスはアルファでありオメガであって、いつも初めをもって終わりを示される。

行に行を重ねる方法論を、今回の記事でダニエル書第4章と第5章を取り上げて考察するにあたり、これから採用することにする。

キリストが来られるか来られないか、その時を定める真のメッセージは誰にも与えられていない。神は、キリストの再臨が五年、十年、二十年遅れると言う権威を誰にも与えておられないことを確信しなさい。「だから、あなたがたも備えていなさい。思いもしない時に人の子は来るからである」（マタイ24:44）。これが私たちのメッセージであり、まさに天の中空を飛ぶ三人の天使が告げ知らせているそのメッセージである。今なすべき働きは、墮落した世界にこの最後のあわれみのメッセージを宣べ伝えることである。天から新しいいのちが来て、神の民すべてをとらえつつある。しかし、教会には分裂が起こる。二つの陣営が形成される。麦と毒麦は、収穫の時まで共に育つ。

この働きは、時の終わりに至るまでいよいよ深まり、いっそう真剣なものとなる。そして、神と共に働くすべての者は、一度聖徒たちに伝えられた信仰のために、最も熱心に奮闘するだろう。彼らは、すでにその栄光をもって地を照らしている今のメッセージから、引き離されることはない。神の栄光のほか、ために奮闘する価値のあるものは何もない。堅く立ち続ける唯一の岩は、とこしえの岩である。誤りに満ちたこの時代における避け所は、イエスにある真理である……。

預言は一つひとつ、行に行を重ねるように成就しつつある。私たちが第三天使のメッセージの旗印のもとにいよいよ堅く立てば立つほど、ダニエル書の預言をいっそう明確に理解するようになる。というのも、黙示録はダニエル書を補うものだからである。神に聖別されたしもべたちを通して聖霊によって示された光を、より完全に受け入れるほどに、古の預言の真理は、永遠の御座のように、いよいよ深く、いよいよ確かなものとして現れてくる。私たちは、神の人々が聖霊に動かされて語ったのだという確

信を持つようになるだろう。預言者たちを通して語られた御霊の言葉を理解するためには、人は自らも聖霊の感化のもとにある必要がある。これらのメッセージは、預言を語った人々のためではなく、その成就の光景のただ中に生きている私たちのために与えられたのである。

もし主がこの務めを私にお与えにならなかったなら、私はこれらの事柄を述べることができるとは感じなかったでしょう。あなた以外にも、しかも一人や二人ではなく、あなたと同様に自分は新しい光を得たと思い、それを人々に示す用意のある者たちがいます。しかし、彼らがすでに与えられている光を受け入れてそのうちを歩み、長年にわたって神の民が堅持してきた立場を裏づけている聖書の上に自らの信仰を築くことこそ、神に喜ばれることです。永遠の福音は人間の働き手によって宣べ伝えられるべきです。私たちは、天の中空を飛ぶものとして表されている御使いたちのメッセージ、すなわち墮落した世界への最後の警告を、告げ知らせるべきです。もし私たちが預言するように召されていないとしても、預言を信じ、ほかの人々の心に光を与えることにおいて神と協力するように召されているのです。私たちはそのことに努めています。『選ばれたメッセージ』第2巻、113、114。